

WEDNESDAY

16

Jun 2010

第 329 号

中小企業家同友会上海俱樂部ニュースレター

TEL 86-21-6236-0116

E-mail: doyukai@shanghai-mall.com

〒200336 上海市延安西路 2299 号上海世貿商城 5F-B57



中国最新情報

1. 中国の国際収支、大幅な黒字が続く見通し-----	1
2. 大中70都市の不動産価格12.4%上昇 5月-----	2
3. 5月の中国人民元建て新規融資、6394億元に減少-----	2
4. 6大都市の住宅在庫、26万件に=08年の市況低迷時に近づく-----	2
5. 中国、富豪の消費能力ボーダーライン1億元に-----	2
6. 中国銀行監督当局、不動産と地方政府に対する融資リスクを警告-----	3
7. 開園46日目で、入場者数がまた最多に-----	3
8. 5月の財政収入、前年比2割増の7917.66億元-----	4

寄稿集

カシュガル近況	(株)小島衣料オーナー	小島正憲-----	5 12
中国全土にスト波及か?	(株)小島衣料オーナー	小島正憲-----	13 15

中国最新情報

中国の国際収支、大幅な黒字が続く見通し

中国国家外為管理局(SAFE)は10日、今年の国際収支は依然として高水準の黒字が続く見通しだと明らかにした。

2009年の国際収支は4420億ドルの黒字で、08年の4551億ドルから黒字幅がやや縮小した。2010年第1・四半期の黒字は959億ドルだった。

SAFEはまた、外貨準備の多様化を進めるという以前からの目標をあらためて表明し、投資ポートフォリオにおける通貨や資産配分の適正化を図っていく考えを示した。 [ロイター] 6月10日



大中70都市の不動産価格12.4%上昇 5月

国家統計局がこのほど発表した今年1-5月の不動産市場の運営状況データによると、今年5月には全国70カ所の大中都市の分譲住宅販売価格が前年同月比12.4%上昇し、上昇幅は前月比0.4ポイント縮小した。前月との比較では0.2%上昇し、上昇幅は前月比1.2ポイント縮小した。前月比上昇幅は14カ月ぶりの低い水準となった。5月の分譲マンションの販売面積は6777万平方メートルで前月比1274万平方メートル(15.8%)減少し、販売額は3335億元で同1113億元(25.0%)減少した。

データによると、1-5月の不動産開発投資は1兆3917億元で同38.2%減少し、不動産開発企業の分譲住宅施工面積は28億5100万平方メートル(同30.5%増)、土地購入面積は1億2943万平方メートル(同31.1%増)だった。分譲マンション販売面積は3億200万平方メートルで同22.5%増加し、増加幅は1-4月を10.3ポイント下回った。 [人民網日本語版] 6月10日

5月の中国人民元建て新規融資、6394億元に減少

中国人民銀行(中央銀行)は11日、5月の人民元建て新規融資がネットベースで6394億元になったと発表した。4月の7740億元から減少した。

5月末時点の人民元建て融資残高は前年比21.5%増加した。

マネーサプライM2伸び率は前年比21%となり、4月の21.5%から鈍化した。

ロイターがまとめたエコノミストの予想中央値は、人民元建て新規融資が6000億元、同融資残高が21.4%増、M2伸び率は21%だった。 [ロイター] 6月12日

6大都市の住宅在庫、26万件に=08年の市況低迷時に近づく

14日付の中国紙、中国経営報によると、北京、上海、重慶、深(ツチヘンに川)、広州、杭州の6大都市の住宅在庫が6日時点で26万1081件に達した。

2008年に住宅価格が大きく下落した当時の在庫は28~30万戸。当時の水準に急速に近づいている。

すでに、北京などでは前月比の住宅価格が下落に転じたほか、不動産大手も実質的な値引きを講じており、今後、価格が一段と圧迫される恐れが出てきた。

都市別では重慶が9万2492件、北京が8万8998件と大きく積み上がっている。面積で見ると、北京が最も在庫を抱えているという。

週間ベースの不動産成約件数も大きく減少。減少幅は20%を超え、「08年の不動産市況低迷時でも、成約件数の減少ペースはこれほど急激ではなかった」(業界関係者)との声も出ている。特に広州と北京で減少幅が大きいという。

関係者によると、08年当時は、成約件数が3カ月連続で20%前後減少し、在庫が27万~30万件に達した段階で、大手デベロッパーが一斉に値下げに乗り出したという。 [時事通信] 6月14日

中国、富豪の消費能力ボーダーライン1億元に

中国で富豪層として認められる人々の消費能力ボーダーラインが前年より22%上昇して1億1千萬元(約14億8千円)となった。上海在住の英国人公認会計士・フージワーフ(中国名、胡潤)氏が主宰する研究院は12日、中国の富豪層の消費価格指数に関する最新データを発表した。それによると、消費価



格指数は前年同期の 4.6% から 11.3% に上昇した。これは富豪層の仲間入りをするためのボーダーラインがさらに高まったことを示している。調査によると、中国で 1 千万元(約 1 億 3400 万円)以上の消費能力を持つ富豪は前年比 6.1% 増の 87 万 5 千人、うち 1 億元(約 13 億 4 千万元)以上の消費能力を持つ富豪は前年比 7.8% 増の 5 万 5 千人となった。北京青年報が伝えた。

同データによると、今年の高級住宅物件の価格は昨年の 1.8 ポイント減から急激な上昇を見せ、上昇幅は 45.1% に達している。これは他の商品価格の平均上昇幅と比べると、ほぼ 4 倍に相当する。豪華旅行ブームで旅行商品価格が先高見込みとなり、今年の上昇幅は 13.4% となった。また自動車・ボート価格の平均上昇幅は 1.5%。うち上昇幅が最大のもはロールスロイス「ファントム」のロングホイールベースモデルで、12% 増の 920 万元(約 1 億 2300 万円)となった。高級酒の価格上昇幅は昨年とほぼ横ばいで、平均上昇幅は 9.1% だった。

調査によると、中国で富豪層と認められる人々の消費能力ボーダーラインは前年より 22% 増えて 1 億 1 千万元となった。上海のある富豪を例にとると、不動産 3 軒を所有しており、1 軒は 400 平米の豪華一戸建て、もう 1 軒は上海市街地のマンション、残りの 1 軒は「中国のハワイ」と言われる三亜市にある別荘だ。豪華な邸宅の中には骨董品のほか、古い掛け軸や著名な現代画家の作品が収蔵されている。調査によると、富豪が所有する自動車の平均台数は 4 台、時計の平均個数は 5 個だという。また余暇の過ごし方としては旅行やゴルフ、水泳が人気で、出国頻度は 2 年前より 40% 増加している。

「人民網日本語版」 6 月 13 日

中国銀行監督当局、不動産と地方政府に対する融資リスクを警告

中国銀行業監督管理委員会(銀监会)は 15 日、世界経済の回復が「ゆっくりで曲折がある」ものとなる可能性を指摘するとともに、中国は貿易保護主義や不適切な不動産融資などさまざまなリスクに直面しているとの見方を示した。

年次報告書がウェブサイトで開催された。

この中で銀监会は「2010 年に一部の信用資産が多大なリスクや損失になる可能性が増している」と指摘。

中国の銀行が直面するリスクのうち、ソブリン債危機や米ドル相場のほか、地方政府の投資担当部門への「賢明でない融資」によるリスクが極めて大きいとの見方を示した。

一部の銀行は、地方政府の部門に多額の融資を行っているが、「リスク管理が不十分で、投資担当部門への融資には極めて大きな潜在リスクがある」という。

劉明康委員長はこれまでも、融資のスピードを厳格に管理する方針と、不動産セクターの融資リスクに特に注意を払っていることを繰り返し警告している。

さらに報告書は、2010 年は個人の住宅融資における「軽率な行動」がリスクとなっていると指摘。

「不動産開発向け融資の連鎖反応にはリスクがあり、注意が必要だ。潜在的信用リスクが増大している可能性がある」との見方を示した。 [ロイター] 6月15日

開園 46 日目で、入場者数がまた最多に

15 日午後 7 時まで、入場者数が延べ 54.1 万人となり、開園以来の最多になった。午前 9 時から午前 10 時の間の入場者数は、すでに 23 万人となり、1 時間ごとの最大入場者数になった。

15 日の団体客数は 16.48 万人で、万博プレゼントの入場券を持つ入場者数は 9.68 人となった。午後 7 時まで、会場で 5 万 5729 枚の入場券が販売され、そのうち夜間入場券の販売は 2 万 635 枚だった。



午後6時までには、団体客が多かったのは、後灘と長清路の二つの出入口で、入場者数は後灘が9.1万人、長清路は7.6万人だった。上南路と高科西路の二つの出入口の入場者数は計17.5万人を超えた。

15日には144回のイベントが開催される予定だ。午後5時までには85回行われ、13.2万人以上の観衆が訪れた。10270人のボランティアが、入場者にサービスを提供した。

会場内の交通運営は秩序正しく運行されている。午後6時までには交通機関の利用者数は約82.8万人となった。

午後4時までには、会場にある5カ所の医療センターは444人を受け入れ、そのうち外傷者数が74人だった。 [東方ネット] 6月16日

5月の財政収入、前年比2割増の7917.66億元

財政部は11日、今年5月の全国の財政収入状況を発表した。それによると、同月の財政収入は7917億6600万元で、前年同月比1348億1900万元増加し、伸び率は20.5%。うち、中央政府の収入が4749億18万元（同16.9%増）、地方人民政府の収入が3168億4800万元（同26.4%増）。

1-5月の財政収入は3兆5470億3900万元で、前年同期比8361億7200万元増加し、伸び率は30.8%。

財政部は、5月の財政収入が大きな伸びを示した主な原因として、経済の安定回復により税収が増加したことや、昨年度同じ月の基数が低かったことを挙げた。

昨年5月から経済が回復し始め、財政収入が増加したため、基数はいくらか上昇したこと、そして今年のタイムラグによる消費税増収要因が次第になくなったことを受け、1から4月と比べて、5月の財政収入の伸び率は縮小した。今後数カ月において、前年同期の基数が高くなったため、財政収入の伸び率は縮小し続ける見通し。

また、通年の財政収入は「前高後低」になるという。 [中国網日本語版] 6月12日



寄稿集

カシュガル近況

15.JUN.10

小島正憲

5月下旬、私は新疆ウイグル自治区のカシュガル市に、「ヤルカンドにおけるウイグル族女性の強制連行」と「アトシュ人」の調査のために、上海 ウルムチ カシュガルと乗り継いで、9か月ぶりに、再度足を運んだ。残念ながらウイグル語の通訳の問題と準備不足のため、その目的を果たすことはできなかった。それでも多くの重要な事態を見聞することができたので、以下に報告をする。ただし初期の目的達成のために、3か月後には十分準備を整えてから、カシュガルへ再々挑戦する予定である。



1, カシュガルからヤルカンドへ。

なぜ、ヤルカンドへ行くのか。

イリハム・マハムティ氏は、「7・5ウイグル虐殺の真実」(宝島社新書・2010年1月23日発行)の中で、昨年のウルムチ暴動を漢族のウイグル族の虐殺であると主張し、それに至るにはヤルカンドで起きた二つの事件が伏線となっていると書いている。

- ・「実はその時期、東トルキスタンでは一つの事件が大問題になっていました。カシュガル地区のヤルカンドという街で、漢族の小学校の教師がウイグル人の生徒23人に対して性的な暴行を加えていたことで逮捕されていたのです。この犯行は、最後に暴行を受けた女の子が母親に告白して明らかになりました。教師は5月24日に逮捕されましたが、翌6月14日には新疆政府が『教師には精神の異常が見られた』と発表し、教師に実刑を与えるのではなく、中国国内の故郷に送還することを発表します」(P. 22)
- ・「中国政府は2006年から東トルキスタン地域(新疆ウイグル自治区)で“扶貧政策”と称し、15歳から25歳までの未婚の女性を強制的に連行し、4000km以上も離れた中国内地の工場で働かせる、という政策をとっています。“扶貧政策”といえば聞こえは良いですが、なぜか対象は若い独身女性だけでした。こうして故郷から連れ去られ、遠く離れた土地で賃金の安い労働に強制的に従事させられたウイグル人女性は年間8万人、府の計画では2010年までに40万人にものぼる量を移送するというものでした。(2008年末には、すでに40万人が連れ出された)。なぜ北京政府は若い独身のウイグル人女性だけを選んで故郷から遠く離れた工場に彼女らを送り込んでいるのか。これがウイグルの民族を根絶やしにしようとする彼らの策謀であることは明らかで



しょう。40万人もの独身女性が連れ去られてしまったら、それと同じだけの男性が同族の中では配偶者を見つけれなくなることを意味します」(P. 140 ~ 141)

私はこの2件を検証し、さらに自分の仮説を証明するために、ヤルカンドに足を運ぶことにしたのである。ちなみに私は前回のカシュガル市疏附県や天津市工業団地の調査で、「ウイグル族女性の強制連行の事実はない」ということを検証しておいた。しかしながらイリハム氏らの「強制連行」説を完全に論破するには、私の仮説を豊富な現地資料で裏打ちする必要があると考えている。なお私の仮説は下記の如くである。

- ・2003年ごろから沿岸部の労働集約型工場では、人手不足現象が起きてきた。
- ・沿岸部の企業は、中国の内陸部に求人基地を作り、人手の確保に奔走した。それはどんどん内陸部に拡大していき、チベット族やウイグル族の地域にまで達した。(現在ではベトナム・ラオス・ミャンマーなどからの外国人ワーカーを採用しているほどである)。
- ・沿岸部の企業にとっては新疆の各地方政府の労務輸出部門に取り入って、そこから派遣を受け入れることがもっとも簡便な方法でもあった。当然そこには癒着が生まれ、金銭の授受が起きていた可能性がある。
- ・新疆の各地方政府では、これが“扶貧政策”を実施する格好のチャンスであるため、積極的に労務輸出を行った。沿岸部企業に、地元送り出し地域へ企業進出を、交換条件とする地方政府もあった。そこでは「強制」という事実実はないが、地方政府の中には「業績と欲」に目がくらんだ幹部が、末端行政組織に「割り当て」を行い、強引に労務輸出を行ったところもあると思う。
- ・沿岸部の労働集約型産業は、繊維、靴、おもちゃなどを中心として女性の職場が多く、そこでウイグル人女性が求められ、それに応じる形でウイグル人男性よりも女性の方が多く派遣された。
- ・ウイグル人女性は漢族にはない独特の美貌を持っており、それが原因で、沿岸部に出たウイグル人女性が、中国の他の地域から来た女性よりも、沿岸部の漢族男性に弄ばれる率が高かったと思われる。
- ・それらの事態にウイグル人男性が怒りを募らせていたと思われ、それが時代錯誤の「強制連行」や「民族根絶やし」という言葉を生み出してしまったと考えられる。
- ・昨年のウルムチ暴動がなくても、ウイグル人は沿岸部に馴染まず、ほとんどが故郷に戻ってしまう傾向にあった。広東省韶関市おもちゃ工場のウイグル人もすべて故郷に戻ってしまった。もし新疆政府に「ウイグル人女性を強制連行して漢族に同化させる」という思惑があったとしても、それは結果としてほぼ失敗しただろう。

ヤルカンド概況

ヤルカンドは漢語では沙車県と表記されている。カシュガル市から東南へ220kmほどのところにある。南の崑崙山脈、北のタクラマカン砂漠にはさまれた地域で、気候は乾燥しており、日照時間は長い。年平均気温は12.3度、年平均降水量は57mm。人口は62万人。ほぼウイグル人である。2000年あまりの歴史を有し、前漢の時代には沙車国として栄え、16世紀にはヤルカンド・ハン国として偉容を誇った。

ウイグル人通訳、姿を消す。

カシュガルからヤルカンドへ向かって、国道315号線を10kmほど走ったところに、「烈士陵园」があった。私は、「なぜこんなところに紅軍兵士の墓があるのだろうか」と不思議に思った。かつてこの地で紅軍兵士がウイグル族と戦ったという記録を目にしたことがなかったからである。カシュガルから同行したウイグル人通訳も、この場所に始めてきたという。とにかく門から中に入って見ると、その記念碑には1959年の対インド戦争で亡くなった兵士約300人を祀ったものであると記してあった。この地から崑崙山脈方面へ1000kmほど行ったところに、インドとの国境があり、その空喀山口という場所で激戦があったという。墓標を読んで行くと、兵士たちは陝西省や河北省などから来ていることがわかった。



烈士陵园にて



そのうちにその墓所の一角にまだ新しい一群のお墓があることに気がついた。そこまで行き、墓碑を読んでみたところ、そこには「1990年4月5日、平息巴仁郷においてウイグル族との戦いにおいて亡くなった御霊を祀る」と書いてあった。つまりこの近くでも民族紛争が起きていたのである。このような墓碑は10以上あった。私はこの衝突があった場所に連れて行って欲しいと通訳に頼んだが、彼はそこを知らないというばかりで、首を縦に振らなかった。仕方がないので地図を広げて見てみると、近くの疏勒県に巴仁郷という場所があった。

私が通訳にそこを指さして、「ここに連れて行け」と強く言っているとき、ちょうど一台の軍用トラックが20人ほどの解放軍兵士を乗せて、墓地に入ってきた。私は彼らもお参りにきたのかと思いつつ、しばらくその様子を見ていた。するとかたわらにいたウイグル人通訳が、突然大木の影に隠れてしまった。そのまま通訳は解放軍兵士がその場を離れるまで、20分ほど姿を現さなかった。やっと出てきたとき、彼の顔はひきつっており、隠れた理由を私に告げもせず、車に乗り込んでしまった。30分ほど無言のまま走ったところで、通訳はやっと口を開き、「あんな場所で軍人とあつたら、半殺しにされるかもしれない。怖かった」と言った。

この会話で、この臆病な通訳では今回の私の調査はとても無理だと、私は判断した。

口蹄疫対策。

車に揺られながらウトウトしていると、車が急停車し、通訳が降りてくださいという。外を見ると警察が居る。私たちの車の前では、バスから乗客がぞろぞろ降りている。後ろの乗用車からも、男性が数人降りた。私ははっきり検問だと思ったので、車を降りて前のバスの一団について歩いて行った。ところが警察は立っているだけで、特別、何もなかった。車から降りた多くの人たちも、何もしないでとにかく道路脇を前の方へ進んで行くだけであった。そのうち地面に石灰が一杯撒いてある場所を通らされ、次になにかの液体が染み込ませてあるような古い絨毯の上を10mほど、最後にまた石灰の上を歩かされた。私たちの車はどうしているかと思いつてみると、なにかの液体を染み込ませた藁束が10cmほどの厚さに敷き詰められた10mほどの道を、ゆるゆると走っていた。その最後では白衣の男が噴霧器を持って待ち構えており、車の下と、運転手の足下に薬液を噴射していた。

ここまで見て、私はこれが口蹄疫の予防対策だと知った。前回カシュガルに来たときには、このようなことは経験しなかった。通訳に「いつから始まったのか」と聞いてみると、「どうも2~3か月前らしい」という返事だった。カシュガルからヤルカンドまでの間、このような「口蹄疫予防検問所」が4か所もあった。おかげで靴がかなり汚くなってしまった。

ナイフの特産品。

カシュガルとヤルカンドのほぼ中間地点に、英吉沙という街があり、その特産品はナイフだという。道路の両側にはずらりとナイフ販売店が並んでおり、中には実演販売をしているような店もあった。私はそのうちの1軒に入って、特産品のナイフを見てみた。たしかによく切れそうなナイフがたくさん陳列してあった。値段は100元~800元ほどだった。中には同型のものが大中小とそろっており、親子3代の男性が持つという立派なものもあった。それらを値踏みしながら、ふと私は、「なぜこの街



ではナイフが特産品なのだろうか」と思った。店員に聞いてみると、500年ほど前、この地方でイスラム教徒と、和田(ホータン)の方の仏教徒が戦ったとき、この地でイスラム教徒が武器として刀を作ったので、その伝統がナイフ作りとして残っているのだという。しかし他の店で同じ質問をしてみると、その店員は「昔、このナイフは羊などの皮を剥ぐのに使われていました。その名残で現在では護身用や飾り物として使われています」との答えが返ってきた。私にはどうもこの店員の答えの方が正しいのではないかと思えた。

いずれにせよ遊牧民は、このナイフ1本で羊の皮を剥ぎ、食事時に使い、時には武器にも使ったのであろう。それが現在、伝統的工芸物としてこの地に存続したのだと考えられる。最後に私は英吉沙と刻印の入った300元のナイフを買った。



ヤルカンド市内。

ヤルカンド市内には警察の姿が少なく、緊張感は少なかった。市内に入るのにも警察の検問はまったくなかった。この点はチベット暴動1年後の周辺都市が、市内へ入る道路を武装警察によって完全に封鎖され、厳しい検問があったのと比べると、雲泥の差であった。市内中心部に入って、いつもの暴動調査のときの要領で、小売店や飲食店での聞き込み調査を始めようとしたが、通訳がまったく指示通り動かないので閉口した。学校の近くに行ったとき、ちょうど下校時間で親たちが子供の出迎えに来ていたので、上記の事件があったかどうかを通訳に聞かせたが、とんちんかんな答えしか返ってこなかった。どうも通訳がごまかして関係のないことを聞いているような気がした。ウイグル人たちも漢族に似ている私の顔を、いぶかしげに見るので、それ以上の追及はやめた。ただし学校の門前には、「私たちの学校は上級機関の指導を歓迎する」という漢語の横断幕が掲げられていた。他の都市では見かけない横断幕だったので、数か所の他の学校にも行って調べてみたが、そこにも同様の横断幕が掲げられていた。しかしこの横断幕と上記の事件の関係の有無については調べようがなかった。



市内には求人広告が多かった。ことに市中心部に新しくできた商店街には、具体的な待遇まで明記した求人広告がデカデカと出ていた。給与は600元(手当別支給、社保・衣食住会社持ち)から1000元というのが相場であった。他の場所でもだいたい3軒に1軒の割合で、店頭求人広告が貼ってあった。たまたま入った喫茶店にも、野外の大きな木の幹にウイグル語で従業員募集という貼り紙がしてあった。ヤルカンドでもいたるところで、ビルやマンションの建設ラッシュが見られ、経済は超活性化している様子であり、周辺の村の若年労働者を、それらがすべて吸収し尽くしてしまっているのではないかと懸念するほどであった。

ヤルカンド・ハン国の陵墓。

市内の中心部に、16世紀にこの地で栄えたヤルカンド・ハン国の陵墓があり、王宮跡やモスクがあった。この王国はカシュガルのアバ・ホジャに滅ばされたという。ここに祀られているアマニサ・ハン王妃は、この地方の舞曲を集大成し、音曲「十二木卡姆」を作り上げたことで有名である。

タクラマカン砂漠の入り口 = 喀拉蘇。

ヤルカンドからさらに50kmほど東南に走ったところに、喀拉蘇(カラソ)という街があり、そこから東へタクラマカン砂漠が広がっているという。往復2時間ほどかかるということだったが、せっかくここまで来たのだから、タクラマカン砂漠を一目見ようと思い、行ってみることにした。道中の村は質素な住居が多かったが、砂漠の近くだということに意外に緑に覆われているところが多かった。視界にはすでに雪山の姿はなく、さりとしてカレーズのようなものが作られている様子はない。水はどこから来ているのだろうかと思い、窓外を見続けていると、地下水をポンプで汲み上げている場所をみつけた。そこではきれいな地下水が大量にあふれ出しており、そこから畑地まで溝が掘られ、水が送り込まれていた。そのような汲み上げポンプは道路沿いに、約500mおきに設置されていた。



タクラマカン砂漠の入り口と称される場所には、10mほどの高さの木製の物見台が作ってあった。今にも倒れそうであったが、上がってみると、そこには広大なタクラマカン砂漠が広がっており、壮観だった。その光景にしばらく見惚れていたが、暑くて体がひからびてしま





いそうだったので、そこは適当に引き上げた。帰路、喀拉蘇県の街中で、偶然に労務輸出事務所の看板をみつけたので入ってみた。そこでは事務員が一人ひまそうにしているだけで、事務所内は閑散としていた。事務員に通訳を通してウイグル語で、「私はこの村で縫製工場を稼働させたい。600人ほどの若い女性の採用は可能か」と聞いてみた。すると「この村には若い女性はいない。みんなヤルカンドやカシュガルに出て行ってしまっている」との答えが返ってきた。やりとりはウイグル語なので、その真偽を確かめることはできなかったが、その事務員がいかにも面倒くさそうな態度を示すし、通訳がその場を早く離れたいという素振りを見せるので、私もそれ以上の探索はできなかった。

2. カシュガルからアトシュへ。

なぜアトシュへ行くのか。

先日私は、ウズベキスタンの首都タシケントで、「ウイグル族の間でも商売の上手いのは、“アトシュ人”である」という話を聞いた。この話は初耳であったので、ぜひアトシュへ行き、その真偽を確かめてみたかった。幸い、アトシュ(阿図什)は、カシュガルの近くであったので、ヤルカンド調査と兼ねてその地に出向くことにしたのである。

アトシュ概況

アトシュ市はカシュガルの北方35kmに位置している。人口は20万人であり、住民の80%がウイグル族。漢時代には疏勒国に、隋時代には突厥に治められていたが、唐時代に入って漢族の支配下になった。古代のシルクロードの要衝であり、現在に至っても依然として貿易が盛んな地域である。なおアトシュをアルトゥシュと表記する場合もある。

アトシュ市内。

地図上ではカシュガルとアトシュはわずか50kmしか離れておらず、隣町という感じである。ところが実際に行ってみると、カシュガルとアトシュの間には高い山と河があり、両市はそれらで一線を画されている。同じウイグル族でもカシュガル人とアトシュ人は、山を貫いて道路ができるまではあまり交流がなかったようである。通訳が、「アトシュ人はたしかに昔から商売上手と言われており、多くの人が中央アジアを含めて世界中に散らばっている。それに比べてカシュガル人はカシュガル近辺から出たがらない人が多く、内向的である。市内を調べればその証拠がなにか出てくるだろう」と話してくれたので、アトシュ市内を車で巡回した。

するとある商店街の入り口に、「民族団結は金」という横断幕が掲げられていた。私はそれを見て、まさに商売人の街らしい標語だと感心した。しかしながらバザールにも、博物館にも図書館にも、そこには「アトシュ人の商売上手」を裏付ける証拠は見つけ出せなかった。残念だったが、それ以上手の打ちようがなかったので、アトシュ周辺の文化遺産の調査に切り替えることにした。なお通訳の話によれば、カシュガル市内のビルはアトシュ人所有の物が多いという。

サトク・ブハラ汗陵墓。

アトシュ市の西南2kmほどの地点に、サトク・ブカラ汗という名の王の陵墓があった。この王はカラハン王朝で最初にイスラム教に帰依し、それを国教にし、915～955年まで40年間在位していたという。この陵墓は新疆地域に現存する最古のものであり、しっかり保存されていた。この陵墓がアトシュにあることから、かつてこの地が新疆地域のイスラム教の中心であった可能性が高いと思われる。

二つの仏教遺跡。



アトシュ西南約14kmの地点に、三仙洞という名の仏教遺跡がある。河で削り取られた岩山の中腹に、高さ2m、奥行き2.7mの洞穴が3つ掘られており、中には10体以上の仏像が描かれている。漢代の作といわれ、中国でもっとも西にある仏教遺跡であ





るという。

アトシュ南約20kmのところ、莫尔仏塔という名の仏教遺跡がある。砂漠の中に二つの塔が建っている。一つは基礎部分が1辺12.3m、高さ8.4mの“舍利子”と呼ばれている塔、もう一つは底辺が25×23.6m、高さが7mほどの寺院跡。ともに唐代のものとされている。このような仏教遺跡が残っているところから、やはりこの地がかつてはカシュガルより栄えていたことを想像させ、同時にこの地で仏教とイスラム教がせめぎ合っていたことをうかがわせる。

ナチスと戦うウイグル族。

昼食を食べるために入ったレストランで面白い物を見つけた。その壁にはナチス軍と戦っている兵士の絵が掛かっていた。私が「なぜこんな絵が、ここに掛かっているのだろうか」と不思議そうにながめっていると、通訳が「これは第2次大戦にソ連兵として参加し、ナチスと戦ったウイグル族の絵です。戦っているウイグル族の兵士たちが、ラウップ(ウイグル族の民族楽器)を背負っているでしょう」と話してくれた。第2次大戦当時、イリ地方の若者たちはソ連兵として西部戦線で戦ったのだという。したがってウイグル族は、現在でも中国人という意識が少なく、カザフスタン・ウズベキスタン・キルギスタンなどの国の人々との交流が強いのだという。たしかによくよく地図を見ると、イリ地方はカザフスタンと草原続きで、この地の住民はカザフスタンとの往来には障害がないように思われた。次回にはこの地方に足を運び、この地形を見て、ナチスと戦ったという老兵士を見つけインタビューしてみたいと思う。



ナチスと戦うウイグル族兵士の絵

3. カシュガル市内。



市内の変貌。

9か月ぶりに訪れたカシュガルは大きく変わっていた。たくさんの古民家が壊され、高層ビルの建設ラッシュが始まっていた。すでに完成した高層ビルが数棟、建設途中のものが数棟、平地にされ建設予定地とされている場所が数か所あった。このまま建設が進めば、来年の今頃になると、これらの高層ビル群でカシュガルの風景は一変しているに違いない。たしかに文化遺産であるカシュガル古城は破壊されていないが、エイティガールモスク周辺の古民家は、ほぼ無くなりつつあった。「この古民家の住民はどこに移住させられたのか」と通訳に聞くと、「カシュガル市郊外の3か所に移住している」と言うので、そこまで見に行ってみた。そこには住み良さそうなマンションが林立していたが、通訳の話に寄ればなにかと住民の不満が多いという。市内の高層ビルの建設会社は、カシュガル資本のものが多くという話だったが、当然漢族資本も進出してきているものと思われる。この高層ビル建設ラッシュは、中国政府の4兆元の内需活性化政策が、着実にカシュガルにも浸透してきていることを示していた。なお広東省の深圳市がカシュガル市の経済活性化の後押しをしており、私の泊まったホテルに深圳市が事務所を構えていた。



次に大きく変わっていたのが、求人広告であった。それらの数はほぼ倍増しており、しかも派手になっており、給与などの待遇を具体的に明記したものが多くなっていった。また前回は見かけなかった政府公認のウイグル語だけの求人広告も出回っていた。目抜き通りの漢族商店街では、ほぼ2軒に1軒の割合で店頭求人広告が貼ってあった。求人職種も総経理、店長からワーカー、皿洗いまで多岐にわたっていた。給与は最低が800元(手当別、社保別、飲食住会社側持ち)で、最高は5000元(同条件)であった。

郊外には、以前にはなかった工場が次々と建てられていた。物流基地という看板を掲げた建物や、原油を備蓄しておくような建築物、太陽光発電研究所と称する工場などが並んでいた。

このような建設ラッシュの結果、カシュガル市経済が沸き立っており、求人広告の激増はいつでも人手不足に陥っていることを示すものだと考えられる。昨年のウルムチ暴動以来、ウイグル族は中国全土から新疆に戻ってきている。しかしながら中国政府の内需活性化政策に後押しされた活況によって、新疆地区では失業者が増加するのではなく、むしろそれらを吸収してもまだ足りないという状況が出現しているようである。

大動物バザール。

ヤルカンドからカシュガルに帰った日が、ちょうど日曜日であり、市内で大動物バザールが開かれているというので、すぐに見に行っただ。そこには大勢のウイグル族が、山羊・牛・ロバ・馬など持ち寄り、盛んに売買をしていた。値段は普通の山羊で1000～1200元、牛で8000元ほどだった。この家畜がウイグル族農民の貴重な現金収入となっており、口蹄疫への警戒心の高さも頷けた。

班超の足跡。

カシュガル市内南部に、班超と36人の部下の彫像が建てられている。班超は後漢の時代に、当時、疏勒国に属していたこの地に遠征しカシュガルとヤルカンドを降し、36人の部下と共に、17年間統治したという。中国政府は、そのときの遺跡がまだわずかに残っているということを口実に、1994年から2年間をかけて、ここに立派な記念碑を作った。当然のことながら、ここに来るのは漢族のみで、ウイグル族はほとんど来ないという。同行のウイグル人通訳もここに来たのは始めてだと話した。

香妃墓。

カシュガル市内西北部に、アバ・ホジャの陵墓がある。この陵墓はイスラム教のモスクとして1640年から造営されはじめ、その後、礼拝の指導者であり、またこの地の統治者であったアバ・ホジャー族(合計5代72人)が埋葬された。中でも有名なのが、清朝乾隆帝の妃となったイパル汗である。この妃には逸話が残されている。この妃は生まれながらにして体から、香しい沙棗(砂ナツメ)の匂いがただよっており、香妃と呼ばれていたという。アバ・ホジャはこの香妃を乾隆帝に献上し、清朝との和を保とうとした。香妃はやむを得ずその命に従ったが、北京に着いてすぐに服毒自殺をした。嘆き悲しんだ従者たちは棺を車に乗せ、124人が3年かけてカシュガルの地



まで運んできたという。現在でも、その棺の運搬に使ったという車が、陵墓内に展示してある。ただし清朝側の記録には、1788年に北京において55歳で病没し、清の東陵に埋葬されたと記してある。近年、中国政府は発掘調査の結果、このことが証明されたと発表している。いずれにせよ現在でもカシュガルの人たちは、香妃服毒自殺説をかたくなに信じており、同時に清朝に降り香妃を献上したアバ・ホジャを嫌っているという。

香妃の体の回りには、彼女の体の芳香に誘われていつも数十匹の蝶々が舞っていたという。陵墓の中庭では蝶々の飾り物が1セット(10匹) = 10円で売られていた。それを漢族女性たちが買い求め、衣服に付けてはしゃぎながら記念写真を撮っていた。ちなみに砂ナツメを食べてみたが、良い匂いもしなかったし、美味しくもなかった。

ユスフ・ハス・ハシフ陵墓。

カシュガル市内南部に、ユスフ・ハス・ハシフ(1019~1085)の陵墓がある。彼は11世紀にこの地で栄えたカラハン王朝時代の哲学者であり同時に文学者でもあった。彼は“福楽智慧”の作者として知られている。この著作は1069年から2年間かけてウイグル文字で書かれ、長編叙事詩の体裁で全編85章からなり、当時の王に献上されたものであるという。陵墓の壁には、その文章の一部分がウイグル語と漢語で彫り込まれていた。

漢語の方を読んで見ると、その中身は“福楽智慧”という名称に反して、「王への治世・処世の献策」というものであった。私はそれが、「インドのカウティリヤの実理論」や「イタリアのマキャベリの君主論」に匹敵するのではないかと思った。なぜならそこには、「英明な君主は能力があり賢明な幹部を任用しなければならない。また賢哲な人材の補佐が必須である。戦時にはいかに軍隊を指揮するか。戦時にはいかなる計略を用いるか」などという項目が並んでいたからである。私はこれをじっくり読み、日本語に翻訳してみたいと思い、事務所にいきウイグル語で書かれた本を欲しいと言った。ところが漢語のものしかないという。仕方がないのでまず漢訳されたものを買いついで市内の古本屋に探しに行った。そこでやっと埃だらけのウイグル語版を見つけ買い求めた。店の主人が「これはもう手に入らない代物です」と話してくれたので、貴重な骨董品を手に入れた気分であれしかった。

モハマド・カシュガル陵墓。

カシュガル市内から西北へ50kmほど車で走ったところに、モハマド・カシュガル(1008~1105)の陵墓がある。彼もまた11世紀にこの地で栄えたカラハン王朝時代の言語学者である。彼は若き日にトルコまで旅をし、そこで大いに学び、“突厥大辞典”を著し、その後カシュガルに戻った。この著作はウイグル語版百科全書ともよばれており、当時の各分野の最高の知識を網羅しており、現代でも価値が高いという。彼はこの著作を基に、この地で学校を開き、若者たちの教育・啓蒙活動に後半生を捧げたという。私はこの本も日本語に翻訳してみたいと思い、ウイグル語版と漢語版の両方を買求めた。

カラハン王朝時代のカシュガルに、ユスフ・ハス・ハシフとモハマド・カシュガルという著名な二人の学者が活躍していたということは、この時代のカシュガルが繁栄しており、高い文化水準を誇っていたということである。現代に生きる私たちは、その事実やこの文化遺産を、日本を始め世界の多くの人に知ってもらう必要があると思う。同行のウイグル人通訳も、「自分も勉強してみたい」と言い、そこでウイグル語版の本を買求めていた。

以上



中国全土にスト波及か？

11. JUN. 10

小島正憲

“黒い5月”。

5月、中国全土で大型ストライキが頻発した。ネット上では、それを“黒い5月”と呼んでいる。規模が大きくしかも表面化しているものだけでも、山東省の山東棗莊第一綿紡、南京の新蘇熱電公司、深圳の横岡荷坳百達五金塑襟場、広東省仏山のホンダ傘下の工場、山西省大同の国营星火制約場、江蘇省昆山の錦港集団、重慶の甌江齒輪轉動公司、上海市のシャープ傘下の工場、北京の現代自動車傘下の工場、同市凱萊大酒店、雲南省紅河州のバス公司、甘肅省蘭州の蘭州維ナイロン工場、広東省深圳の美律電子、同省惠州の亜成電子、湖北省隨州の綿紡績、河南省平頂山の平棉紡織集団、陝西省西安のプラザー工業の傘下工場、などがある。

広州ホンダ傘下の部品工場の20日間に及ぶストは、約33%の賃上げでようやく終結した模様である(ただし他の複数の部品工場にも波及し、そこで新たにストが始まっているという情報もある)。また深圳の富士康科技集団では労働者の自殺が相次ぎ社会問題化したため、会社側は条件付きながら67%の賃上げや労働条件の改善を余儀なくさせられた。これらの情報は、ただちにメディアやネット、携帯電話のメールなどで、全国の労働者の知るところとなった。そして労働者はこれらの成功体験の情報から、ストを行えば簡単に賃上げが可能であることを学んだものと思われ、現在、中国各地に次々とストが飛び火しつつある。

6/06・07・08の3日間、江蘇省昆山市花橋鎮曹安路8号の台湾系機械部品工場の KOK 書元機械(昆山)有限公司 で、1800人以上の従業員が待遇の改善を求めてストライキを行った。会社側が何も対応しなかったため、6/07朝、従業員たちは政府に陳情デモに向かうため、横断幕を掲げ工場の正門前に集まった。ところがこの会社の場所は上海市と隣接しているので、万博開催中の上海のイメージダウンを怖れた地元の警察が、50人ほどでこのデモを解散させようとした。その結果、従業員と衝突し混乱が広がった。政府は昆山市内からさらに150人の警察を動員して、強制的にこのデモを収束させた。この衝突で従業員側に50人の負傷者(うち5人が重傷)が出たという。



6 / 07朝の様子

以上は6/10に現地検証済み。労働者たちは会社側に13の要求を提出しているが、11日現在ではまだ正式回答はないという。しかしながらここで注目しておかねばならないのは、労働者たちが「団結は力なり。抗議には望みがある。我々には、“ホンダ”・“富士康”の手本がある」を、合言葉にして会社側と交渉を続けていることである。労働者たちは、まさにホンダのストの成功体験を学んで、それに続こうとしているのである。

今後、ホンダのストの成功体験が中国各地に波及し、 昆山KOK のようなストライキが頻発し、おそらく2010年後半は中国全土でストの嵐が吹き荒れるものと思われる。

中国政府と富士康の対応。

これらの事態に対して、中国政府は今のところ、企業側に労働者の待遇改善を促す姿勢を示しており、



ストを鎮圧する側には回っていない(昆山だけは、万博への影響力を考慮して、警察の介入があった模様)。広州市では総工会がホンダや富士康の問題を重視して、労働者向けの「法律相談窓口」を設けることにした。また全国総工会は、9日に声明を発表し、その中で「労働者の権利保護は安定維持の前提かつ基礎であるとし、従業員代表大会の影響力を高め、労働者の知る権利や表現する権利を守り、労働者の合法的権益を保護する」ことを求めている。広東省の汪洋共産党書記も、地元政府と富士康に対して、企業管理の見直しや従業員の権利保護を徹底し、類似の事件の再発を全力で防止するように指示したという。これらは従来の労働組合が労使紛争に有効な役割を果たすことができず、今回のホンダの例のように経営者側に立って労働者を収めようとするが多かったことへの反省があり、それらを転換させる意図の表れであるといわれている。

深圳市政府は、これらの労務紛争を事前に回避するために、最低賃金10~22%のアップを前倒しで決定、発表した。また中国政府は、今年末に発表する予定であった「工資条令(賃金条令)」を、これまた6月末にも前倒しで実施する準備をしているといわれている。この「工資条令」には、賃金の労使交渉決定や同一労働同一賃金などが盛り込まれているという。また、政府のブレーンである社会学者たちは、所得の「第1次分配」での労働報酬の比率の向上を訴えている。

富士康の親会社の台湾・鴻海精密工業の郭台銘会長は、これらの事態に遭遇して、8日の株主総会で中国本土にある工場の一部を台湾やインド・ベトナムなどに移転させる方針を明らかにした。富士康だけでなく、台湾企業の多くが、にわかに東南アジアなどへの生産移転を検討、実施し始めた。ストライキの結果の賃上げもさることながら、中国でも韓国並みの泥沼の労使紛争に巻き込まれる可能性が出てきたからである。

労使対決型を選んだ中国政府。

2007年末、中国政府は労働契約法を改正・実施した。その結果、労働者は権利意識に目覚めてしまった。私は2007年末に、この改正労働契約法が中国を「世界の工場」の舞台から引きずり降ろすことになり、中国から外資が大量に撤退する結果を招き、やがて中国経済を疲弊させることになると、再三再四、警告した。

当時、有識者の間でも、この改正労働契約法が労働者の権利を擁護する面を多く含み、経営者側にかなりの負担を強いるものであることから、その施行を危惧する声が多かった。しかしながら胡錦濤政権は、2008年の北京五輪を控えて、民主的な国家としての体裁を取り繕う必要があったため、その第一歩として、旧態依然とした労働契約法の改正・実施に踏み切ったのである。胡錦濤主席にこの決断をさせたのは、2007年の山西省の閻レング工場での誘拐された労働者や未成年が虐待されていたという前近代的な労働実態が、先進資本主義諸国に知れ渡っていたため、その悪印象を一気に挽回しようとしたからであったともいわれている。

しかし私は労働者の待遇を改善するために、あの時期に、あえて労働契約法の改正に踏み切る必要はなかったと確信している。基本的に労働者の待遇は、労働者擁護の法律の有無に関係なく、労働力の需給バランスで決まる。どんなに労働者に有利な法律があっても、景気が悪く、企業が労働者を採用しなければ、労働者の待遇は良くなるはずがない。逆に、景気が絶好調で、企業が労働者をどんどん採用すれば、人手不足となり、企業は人手を確保するためにどんどん労働者の待遇をよくせざるを得ない。すでに中国は2003年から人手不足となっており、その結果、毎年賃金が上昇し、その他の労働条件もどんどんよくなっていた。しかもその傾向は、当分、続くと見られていた。したがって2007年末には、労働契約法の改正は不必要であった。胡錦濤政権は、中国に不必要な改正労働契約法を施行し、中国を労使対決型の世界に突入させてしまったのである。

改正労働契約法の施行は、まさに胡錦濤政権の失政であったと断言できる。当然のことながら、その結果、外資の第1次総撤退ブームが沸き起こり、中国経済は破綻の淵に立たされた。2007年末から2008年前半にかけてのことである。胡錦濤政権は北京五輪を目前にして、大きく戦略転換をして積極的な財政出動を行い、経済の立て直しに躍りとなった。そうこうしているうちに2008年9月、米国発金融危機が世界を襲った。その結果、外資の第2次総撤退ブームが起きた。中国政府は躊躇なく、外需に期待せず、内需の活性化のために4兆元に及ぶ財政出動を即断した。その後の中国経済の急上昇については、周知の事実であり、私が解説するまでもな



いであろう。

第3次外資総撤退ブーム 中国は貿易赤字となる。

次に今後の中国経済の動向について簡単に俯瞰しておく。

現在、経済絶好調の中国は超人手不足であり、労働者は売り手市場で、なおかつ改正労働契約法を楯にとつて、経営者側に賃金の大幅アップを含め労働条件の改善を迫っている。労働者はたとえそのストライキに失敗し、その職場を追い出されたとしても、もっと良い次の職場がたくさん待っている。その意味で、労働者は絶対に負けない戦いをしているのである。まさに現在、中国は労働者天国になりつつあるのである。逆に言えば、経営者側はどのようにしても負ける戦いを強いられているわけであり、これからは地獄の責め苦を味わわされることになるわけである。

ストライキの結果の法外な賃金アップは、中国沿岸部からの労働集約型産業の総撤退に拍車をかけるであろう。さらに超人手不足、労働争議の頻発など、経営者の前には解決不可能な問題が山積みされる。それらを嫌って経営者が中国を後にするため、外資の第3次総撤退ブームが沸き起こる。その結果、中国から労働集約型産業は完全に姿を消し、「中国は世界の工場」が過去のものとなる。

中国政府は産業構造の高度化で、この事態を乗り切る戦略であるらしい。しかし産業構造の高度化以前に労働集約型産業が総撤退してしまい、その戦略は間に合わない。また真面目に働くよりストを行った方がはるかに手っ取り早く儲かるため、だれも真剣に労働せずまた地道に研究する者もいなくなり、産業構造の高度化の担い手が中国で枯渇する。一方で、火がついた内需は消えないので、輸入一辺倒になる。中国の企業家は今や、外需よりも内需の方がはるかに儲かることをよく知っており、内需市場への参入に躍起となっている。したがって中国からは輸出をするものがなくなり、その結果、貿易赤字となる。

内需の活性化のためには、引き続き財政出動を行わなければならないので、財政赤字が激増する。もちろん中国政府はそのためにあらゆる「打ち出の小槌」を駆使して、財源を確保しようとするであろうが、いずれにせよそれは借金である。遠くない将来、中国は双子の赤字を抱えた借金大国として苦しむことになる。

以上